



No. 175

ティークレイク

Tea Break

私のブルー・シャトール

会員 若林 擴

1957年、日本初のロック・コンボとして結成されたジャッキー吉川とブルー・コメッツが、1967年「ブルー・シャトール」を大ヒットさせた。

コンボとはコンビネーションの俗称で、ジャズには大きく分けて「コンボ」と「ビッグバンド」の二つの演奏形態があり、「コンボ」は少人数編成で、各プレイヤーのアドリブ・ソロが演奏の中心となっている。

基本的にコンボ編成も、ドラムやピアノ、ベース等のリズムセクションと、メロディーラインを担当する「フロント」と呼ばれる管楽器の組み合わせからなる。

ブルー・コメッツではメロディーラインを担当する、ヴォーカルの井上大が、ブルー・シャトールのイントロと間奏を銀色に輝くフルートを煌めかせながら吹奏し、「森と泉に囲まれて静かに眠るブルー・シャトール・・・ブルー・ブルー・ブルー シャトール」と自ら歌う姿が若者達の心を奪った。

当時の心を奪われた若者は、50年の時を経て、途中、和の世界にのめり込み、個人教授で、長唄を50年、二人の人間国宝の新内の師匠に、浄瑠璃と新内三味線の教えを受けて弾き語りをして10年（今でも美人の誉れ高かった女流新内の第一人者富士松鶴千代師匠に師事している）。

銀座の飲み屋で津軽三味線の「津軽じょんから6段」から「旧節」を3年。

浅草の三味線屋「みかど」で生田流の琴の師匠に胡弓を4年。

銀座山野楽器でチェン・ミンに二胡の奏法の公開講座で手ほどきを受け、チェン・ミンのNHKの番組で二胡を教習した。

芸大のサマー・スクールで篠笛、締太鼓、小鼓、長唄三味線の各楽器を足掛け6年間習得した。

傘寿を迎えて、和から洋にドラスチックに心機一転した。友人から傘寿の祝いに銀座のヤマハでバイオリンを買って頂き、銀座のヤマハの「クラシック・バイオリン

教室」に入会した。

かねてより、オペラ二期会所属のテノール歌手に師事し、オペラを唄うために、テノールのボイス・トレーニングを受けて、パヴァロティのハイツェーには及ぶべくも無いが、高音のソ、ラまでには楽になるようになっていた。

オペラ歌曲発表会で、プッチーニの「トスカ Tosca」のアリア「星は光りぬ E lucevan le stelle」を歌うことになった。

原曲では、その美しいイントロ4小節はクラリネット又はオーボエなどの木管楽器で演奏されているようなので、このイントロを自らバイオリンを弾いて、ピアノに合わせて唄おうと決めた。

それにしても、まずはバイオリンが弾けなければならぬ。問題は、永年日本伝統音楽の数字又は記号からなる独特の楽譜に慣れていたので、西洋音楽のソルフェージュの勉強をした事が無い。したがって楽譜を素早く読むことが出来ない。

アメリカ人の友人が、昔は、アメリカでもイタリア語のドレミファソラシドは習わなかったそうだ。CDEFGABしか知らないのには驚いた。日本語でも昔はハニホヘトイロと習ったそうだ。ドレミファソラシドは世界共通音階の呼称だと思っていた。

最初に教室で弾いた曲は、感動的なベートーベンのシンフォニー第九番の「歓びの歌」であった。

いよいよ基礎のグループ・レッスンを離れ、「星は光りぬ E lucevan le stelle」の4小節を弾くため、芸大出の先生の個人教授に切り替えて、数百回の練習の後、発表会では遂に念願のバイオリンでイントロを弾き、テノールでオペラの歌曲を唄う事に成功した。

いわば、ルチアーノ・パヴァロティがバイオリンを弾いてオペラ歌曲を唄うようなものだ。

この方法で少しずつ増やしていけば、何時かは全曲を

弾けるようになるだろう。

昔、三人の体が青山学園初等部に通っていた。青山学院初等部クリスマス讃美礼拝にはキリスト生誕を祝う物語の舞台に子供たちが出演した。

親たちはクリスマスの歌の合唱に参加し、「君なるイエスは今あれましぬ、・・・グロリア イン エクセルシス デーオー」と唄った。

楽器の経験のある親は、独奏、助奏、合奏に、フルート、チェロ、バイオリン、ビオラ、ハープ、オルガンなどの演奏を担当した。

1987年12月19日のプログラムによると、助奏のフルートは、当時著名なテニス・プレーヤーの渡辺さんと私の二人、チェロは京都の老舗塗り物師の何代目かの牧さんが真っ赤なジャガー・スポーツのタイプXで練習に乗り付けて来た。

合奏には私の次男と同級生の、今を時めくバイオリニスト、高島知佐さんが卒業生として参加していた。

クリスマスは12月の寒い季節なので、名称は木管楽器とは言え、フルートは今金属管なので冷え切って、息を吹き込んで温めてもなかなか音が出ず、唇が寒さと乾燥でカサカサに成り、本番では二人の内どちらの音が出ているのかも判らず、殆ど成功することはなかった。

当時、冷やかして聞きに来て呉れていた角川書店の角川の奥さんが、ご主人の角川が若い頃、プラス・バンドでフルートを吹いていたそうで、一番前で聞いて呉れ、「貴方のフルートは相当酷いわね」と本当のことを言っていた。

銀座のヤマハでフルートを練習し直し、ユーチューブの画像で、パヴァロティがフルート奏者を伴って唄っている、カンツオーネの「Non ti scordar di me 忘れなぐさ」のイントロと間奏を、フルートで数百回練習した。

500人収容の新宿角筈区民ホールで開催された第9回オペラ歌曲発表会で、フルートを吹いて、テノールで唄うことに遂に成功した。

パヴァロティ自らがフルートを吹いてオペラ歌曲を唄ったようなものである。

写真は、500人の聴衆の拍手とブラボーの嵐の中、香

り高い赤いバラの花に埋もれ、「私のブルー・シャトール」の夢が叶った至福の時の証しである。

